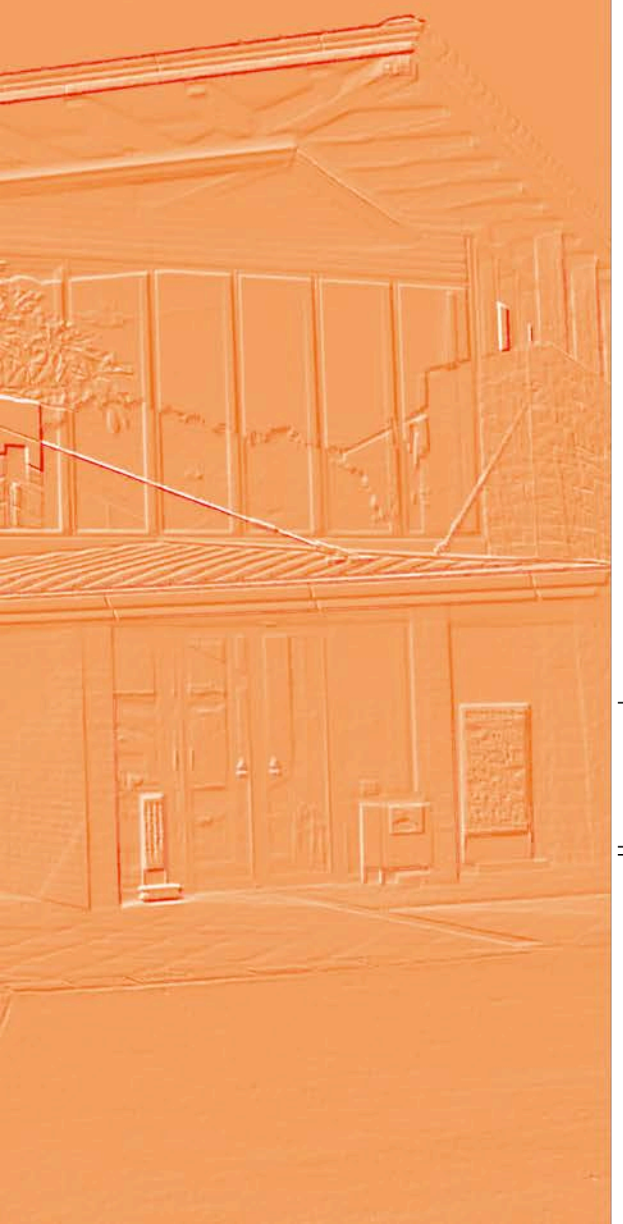
研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第6号



《研究ノート》

志布志市稲荷迫遺跡出土弥生前期突帯文土器の年代学的調査
－大隅半島の弥生前期の実年代－
藤尾　慎一郎･坂本　稔・東 和幸

鹿児島県薩摩川内市上新田遺跡出土弥生土器の蛍光Ｘ線分析
中園 聡，富山 孝一

鹿児島（鶴丸）城前後の城と町づくり
東　和幸

鹿児島県の近代化産業遺産の授業展開
－発掘調査報告書と『かごしまタイムトラベル』を活用して－
國師　洋之

トレハロースを用いた木製品の保存処理（Ⅱ）
南の縄文調査室，榎本　美里

平成 24 年度　年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター
2013.3

『縄文の森から』第６号　目　次

志布志市稲荷迫遺跡出土弥生前期突帯文土器の年代学的調査　－大隅半島の弥生前期の実年代－
藤尾　慎一郎※1・坂本　稔※1・東　和幸・・・・・　１

鹿児島県薩摩川内市上新田遺跡出土弥生土器の蛍光Ｘ線分析
中園 聡※2，富山 孝一・・・・・１３

鹿児島（鶴丸）城前後の城と町づくり
東　和幸・・・・・２５

鹿児島県の近代化産業遺産の授業展開
－発掘調査報告書と『かごしまタイムトラベル』を活用して－
國師　洋之・・・・・３１

トレハロースを用いた木製品の保存処理（Ⅱ）
南の縄文調査室，榎本　美里・・・・・３７

平成 24 年度　年報　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４１

※１　国立歴史民俗博物館
※２　鹿児島国際大学

鹿児島（鶴丸）城前後の城と町づくり

東　和幸

The formation of the castles and the cities in Kagoshima around A.D 1600

Kazuyuki Higashi

要旨

織豊時代から近世初期にかけて，島津氏は三州統一・秀吉への降伏・関ヶ原の戦いなど，激動の時代を生き抜いてきた。この時代における各当主の城づくりや町づくりを通して，各当主の考え方をみていく。義弘が伝統的な城づくりを踏襲するのに対し，家久は新たな考えの基に城づくりを進めた。薩摩藩の拠点となる鹿児島（鶴丸）城は，それまでの東西南北軸から地形に合わせた軸に大きく転換している。また，鹿児島城下も壮大かつ緻密な計画の下につくられていることを紹介する。

キーワード　中世末～近世初頭　島津氏居城　町並み　東西南北軸　地形軸

1　はじめに

最近人気タレントが古地図をたよりに都内を歩くことをはじめとして，各地で町歩きが盛んである。実際歩くことによって，見慣れた風景の中に新たな発見が加わり，私自身各地を歩き回ることを楽しみにしている。遺跡の場合もそうであるが，町歩きをする時も「なぜ，そこに人が住んだのか？」や「何を基準にして町並みがつくられたのか？」など考えながら歩くのもおもしろい。

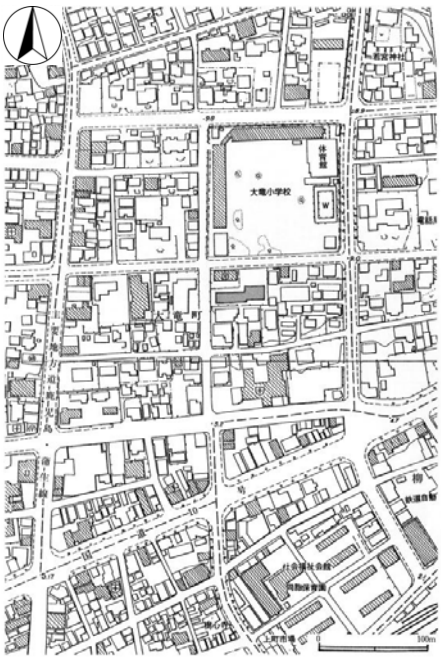
私自身が特に興味を引かれたのが，鹿児島（鶴丸）城下や国分（舞鶴）城下はそれまでの城下づくりと異なるつくり方をしていることである（東 2012）。もちろん，戦国期から天下統一後の安定した時期への変換点であるので当然のことであるが，町並みには当主の考え方が強く反映されている。本稿では，島津氏が盤石の体制を整える 15 代当主貴久から 18 代当主家久までの城づくりをみることによって，現在に繋がる町並みの起源に迫りたい。

2　各当主の城および町づくり

処理島津氏は，守護大名から戦国大名を経て，幕末まで近世大名の座にあった。一つの地域で一つの家系が，これほど長期的に治めていることは全国的に見ても希少な例である。したがって，他地域のように全く異なる系統の領主や藩主が入れ替わることによって町並みが変わることはなく，歴史の変化とともに城づくりや町づくりの考え方が変わってきたとみることができる。今回対象とするのは，15 代当主貴久，その長男である 16 代当主義久と弟の 17 代当主義弘，さらに義弘の子である 18 代当主家久まで，各当主の城づくりをみていくこととする。なお，家久は慶長 11（1606）年に忠恒から改名するが，それ以前についても家久で統一して記したい。

(1) 15 代当主島津貴久（1514～1571 年）

15 代当主の貴久が天文 19（1550）年に築いたのが内城であり，現在の鹿児島市立大龍小学校の敷地にあたる。島津氏が薩摩・大隅・日向の三州統一および九州一円の制覇を目指す拠点として選んだのがこの地であった（五味 1979）。標高 10ｍを測る旧砂丘上の安定した場所にあり，稲荷川河口にある港も近くに位置している。14 世紀に島津氏が鹿児島に拠点をもつようになった東福寺城と清水城，それに歴代の当主が眠る本立寺と福昌寺も一帯の地域に含まれる。内城廃城後は慶長 16（1611）年に文



第 1 図　内城跡

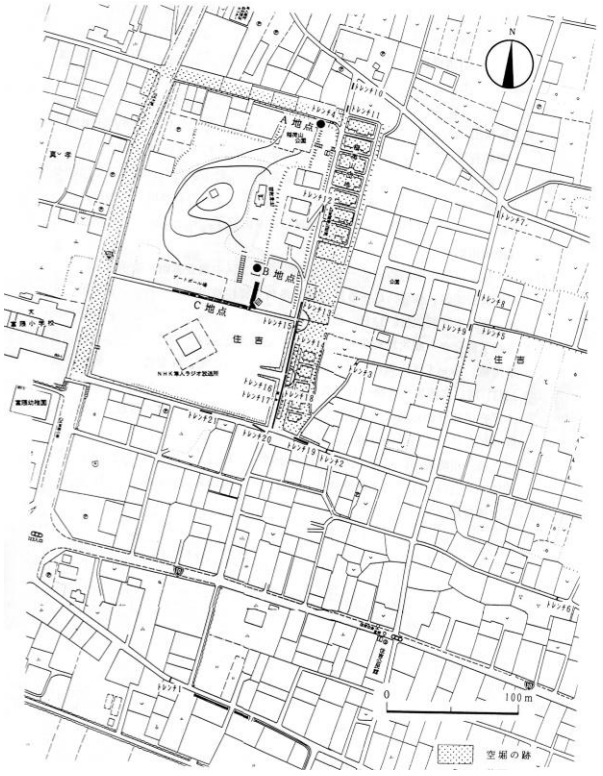
之和尚により臨済宗の大龍寺が開山され，明治２（1869）の廃仏毀釈まで続いた。現在，石垣や堀が残っていないことと，敷地を明らかにする目的での発掘調査がなされていないことから，明確な範囲はわかっていない。史料「御城構之事」（「島津家伝記大概」鹿児島県立図書館蔵）には「築地一重之屋敷」とあり，義弘が瓜生野城（建昌城）の代案として「当時之御屋形之地も，四方ニ御座所を石垣・大堀普請稠被仰付候者」（「家久公御譜中」大日本古文書『島津家文書三』）とあることから，内城は石垣や堀のない築地塀に囲まれていたと考えられる。

明治 35（1902）年測図の地図と現在の区画を比較しても，大きく変わっていないことから，内城がつくられた時も同じような東西南北に合った方向であったことが推察される。内城に入る以前の貴久は伊集院の一宇治城におり，それ以前は伊作城にいたことが知られている。

(2)16 代当主島津義久（1533～1611 年）

ア　富隈城

霧島市隼人町住吉にあり，島津義久が文禄４（1595）年から慶長９（1604）年までの 10 年間入った。国分平野中央に残った流紋岩を基盤とする平城で，標高 32mの頂上からは平野全体はもちろん鹿児島湾奥の動きも見渡すことができる。浜之市港に近く，交易における利便性も高い。敷地は東西 150m，南北 248mの長方形であり，平

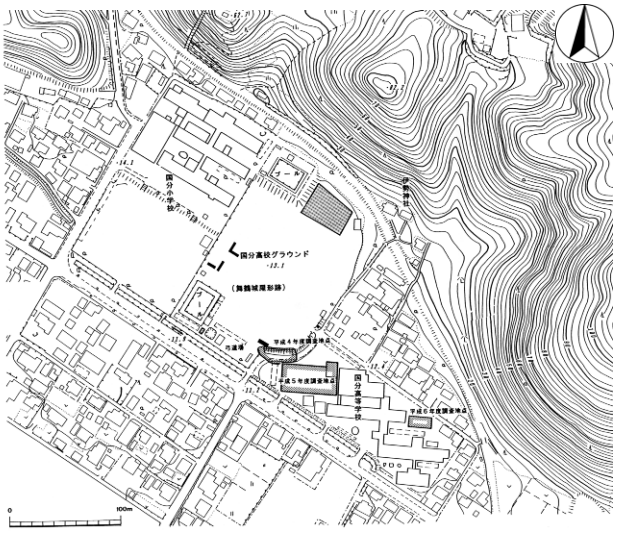


第２図　富隈城跡

坦地の標高は 11mを測る。大手門だけでなく，周囲も高さ 3.5mの石垣を巡らす城である。石材は現地で切り出したとみられ，北側斜面の露頭には矢穴痕がみられる。周辺には御厨・御里・犬追馬場などの小字名が残り，東側にある堀の痕跡は確認調査によっても追認されている。10 年間だけの使用だったので，出土した土師器は編年の基準となっている。富隈城は，西に傾いてはいるもののほぼ磁北を基準としている。（隼人町教育委員会 1999　『冨隈城跡Ⅲ』）

イ　国分（舞鶴）城

島津義久は慶長９（1604）年甲辰 12 月に富隈城を出て，現在国分小学校となっている国分（舞鶴）城に移った。山城を取り込んだ壮大なものであり，国分御屋形である現在の国分小学校には野面積みの石垣と幅 6.5mの堀が残っており，当時の城下づくりが国分市街地の区画として活かされている。区画の方向は磁北に合わせたものではなく，背後の城山から延びる尾根に合わせたものである。それまでの大隅国分寺が所在した磁北に合った区割りを更地にし，地形に沿った大規模な城下づくりを行っている。



第３図　国分（舞鶴）城跡

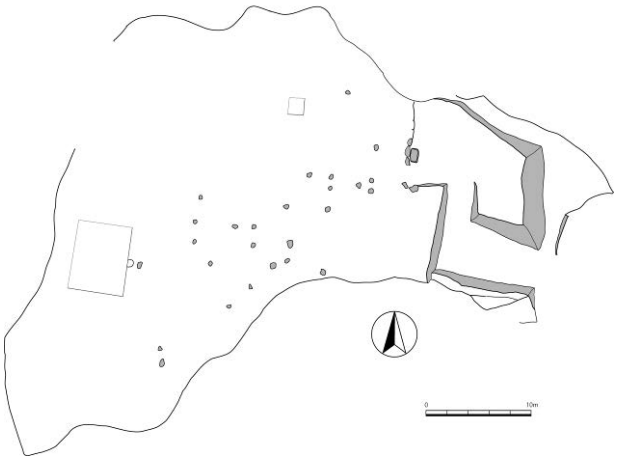
国分の城下づくりを行う場合，どこを基準点としているのかみると，略東西方向の基準は金剛寺跡が考えられる。金剛寺は慶長９（1604）年の開山であり，城下づくりと同時期である。また，地形的にも北と東の変換点であるとともに，鬼門除けとしての機能も果たしたのではなかろうか。金剛寺跡から略西方向を臨むと一直線に筋が通っており，国府があったとされる向花小学校北側の通りまで延びている。では，直交する略南北方向の基準はどこかといえば，現在の愛宕神社が位置する場所が考えられる。国分（舞鶴）城の西端を通り，中之馬場の延

長上には遠く桜島を臨むことができる。愛宕神社は延宝９（1681）年にこの地に祀られたとされるものの，永く大切にされた場所であるからこそ，ここに移されたと考えられる。なお，鹿児島神宮本殿は南向きであるが，参道は国分市街地に平行していることは，国分(舞鶴)城の区割りと無関係ではないと考える。（国分郷土誌編さん委員会　1973 年　『国分郷土誌』）

(3)17 代当主島津義弘（1535～1619 年）

ア　松尾城

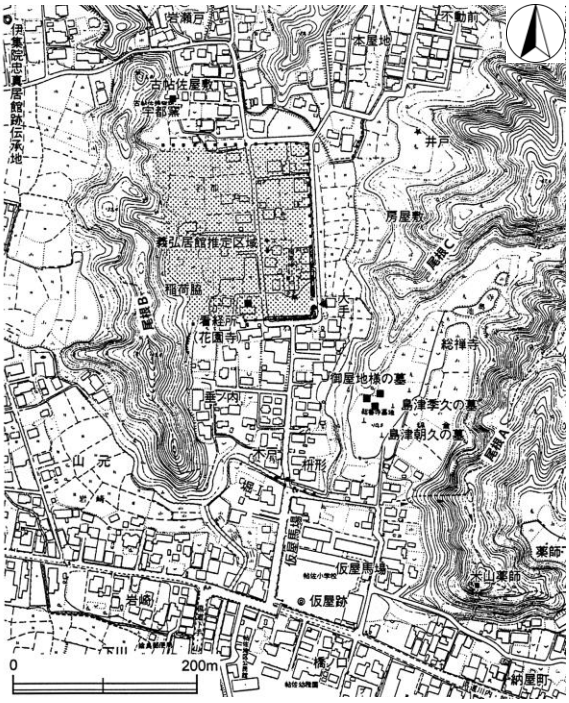
松尾城は湧水町栗野にあり，島津義弘が天正 18 (1590) 年から帖佐に移るまでの５年間居城した。川内川に面した山城であり，注目されるのは本丸跡に残る石垣である。安山岩を用いた野面積みであり，高低差のある枡形が今も残る。鹿児島で石垣がつくられた最初の城といわれ，第４図のように枡形や礎石の配置は磁北に合っている（註１）。（栗野町郷土誌編纂委員会　1975 年　『栗野町郷土誌』）



第４図　松尾城

イ　島津義弘居館跡（帖佐御屋地跡）

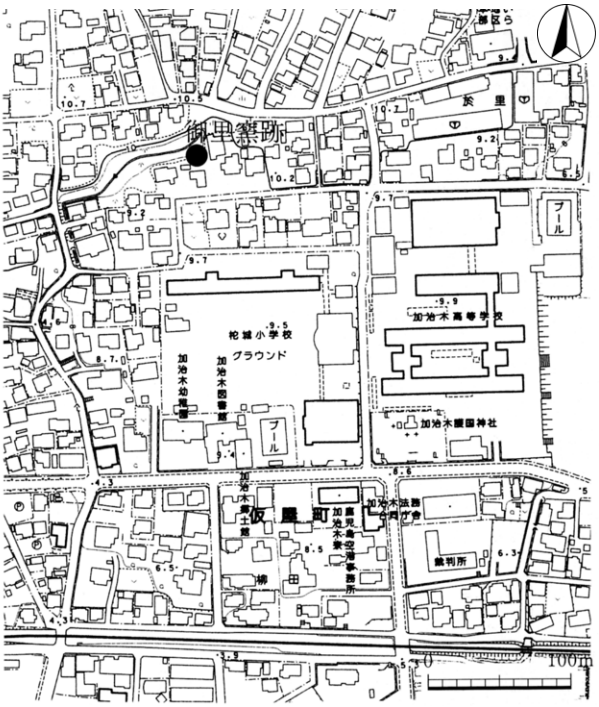
始良市帖佐にあり，島津義弘が文禄４（1595）年 12 月に栗野から居所を移した。南面には別府川が流れ，東西両側には尾根が延びており，狭いながらも鎌倉をイメージするような地形にある。湯湾岳から石を切り出して，野面積みによる高さ３ｍで，延長九十九間の石垣を築いたとされる。平成 12 年度に実施された確認調査によって，石垣の築造方法が富隈城と類似していることが明らかとなった。また，現在の稲荷神社から日陽山花園寺跡を含めた範囲を義弘居館推定区域としている。居館跡および町並みは磁北を基準としており，北東に帖佐新正八幡が位置する。（始良町教育委員会　1994　『始良町中世城館跡』始良町文化財調査報告書（１）　始良町教育委員会　2004　『始良町内遺跡詳細分布調査報告書』始良町埋蔵文化財発掘調査報告書第９集　）



第５図　島津義弘居館跡

ウ　加治木屋形

義弘が慶長 12（1607）年に加治木へ移った時の屋形であり，旧砂丘上に磁北を基準としてつくられている。加治木石でつくられた石垣は，組み合わせが精巧であり，中国との関わりが指摘されている（註２）。敷地の範囲は，現在の加治木高校，柁城小学校，図書館の所在地から御里の裏通りまでの区域が推定されている。（加治木町郷土誌編纂委員会　1966 年　『加治木町郷土誌』）



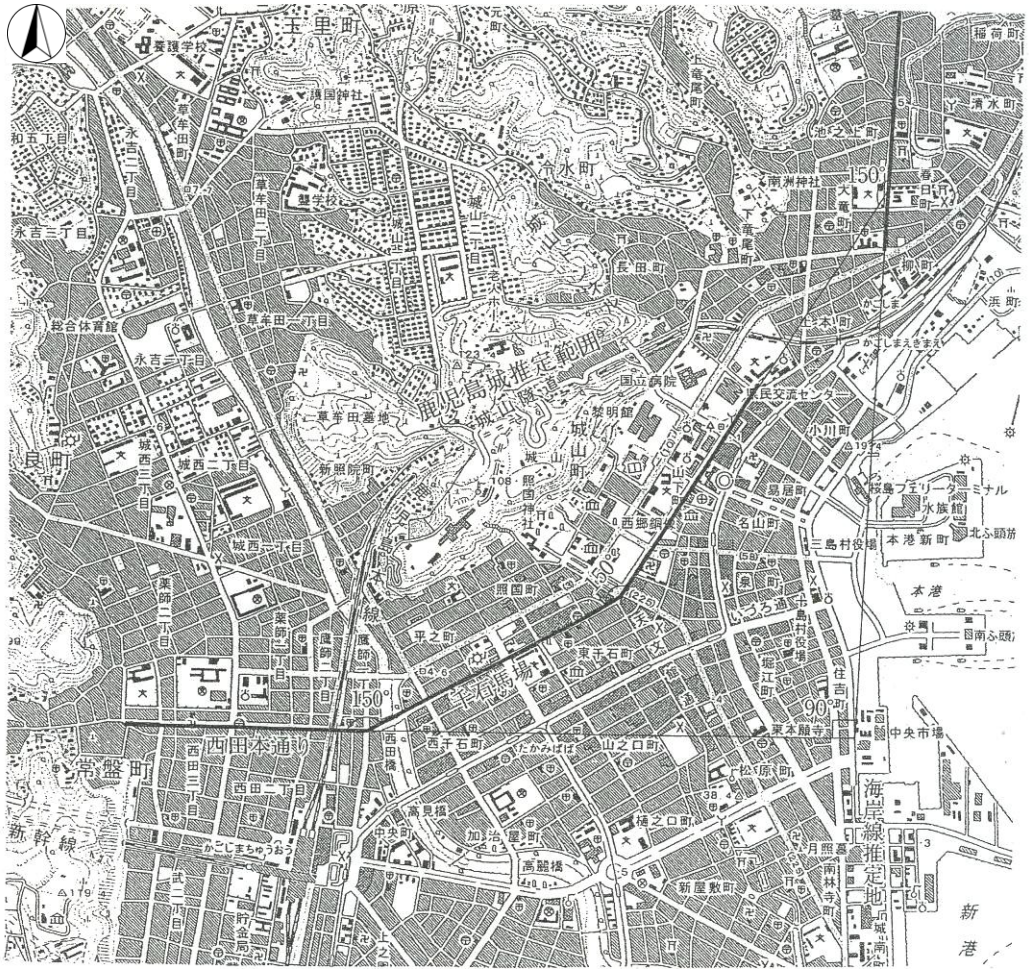
第６図　加治木屋形跡

(4)18 代当主島津家久（1576～1638 年）

鹿児島（鶴丸）城は 18 代忠恒（のちに家久）が慶長６（1601）年から縄張りを始め，1604 年に入城したといわれる。山城部分と平地の館部分から成り，第７図に示した範囲が当初の城内域と考えられる。幕末頃になると，一般的に御厩・本丸・二ノ丸が城内域として認識されているようである。山城部分は上之山と呼ばれ，元々14 世紀中頃に上山氏が城を築いたものである。現在みられる山城部分の遺構が，上山氏によるものか家久によるものであるか断定はできないものの，規模の大きさから家久によるものと考えたい。通常の中世山城にみられる土塁が高さ２ｍ・幅４ｍほどであるのに対し，上之山では高さ 10m・幅 25mほどの土塁が 400mにもわたってみられるからである。通常の土塁は盛り土によってつくられるのに対し，上之山の土塁は削り出してつくられていることが，現在の遊歩道の切り通し断面からわかる。土塁に囲まれた区域は，ちょうど南北に軸がみられる。家久が鹿児島城をつくりはじめたのは関ヶ原の戦いに敗れた直後であり，館部分は小規模のつくりで徳川家康に恭順の意を示しながらも，外から見えない山城部分では強固に守りを固めた家久のしたたかさも窺える。

一方，平地の館部分は上之山と海にはさまれた狭い地形に沿ってつくられている。幅 14mの浅い堀と高さ８ｍの石垣が 360mにわたって築かれただけで，他藩の城と比較すると規模の小ささが顕著である。現在の照国通りと長田中学校体育館が位置する場所に堀があったことから，海と堀に囲まれた範囲が城内域と考えられる。

現在の鹿児島市街地を広く見ると，大口筋の出発地点である「竪馬場に平行する内城東側の通り」が南北に延び，出水筋の出発点である「西田本通り」は東西に延びていることが分かる。「竪馬場に平行する内城東側の通り」一帯は，若宮神社が延文２（1356）年に国分正八幡から遷座したとされるので，この頃には磁北に合った区割りがなされていたと考えられる。一方，出水筋へと続く武岡台地に登るには，地形的に水上坂を通る地点が最適であり，「西田本通り」は水上坂にあわせて新たに東西に計画された道である可能性もある。「竪馬場に平行する内城東側の通り」と「西田本通り」を延長すると，見事に直角に交わっている。二つの道を繋ぐ「千石馬場」と「主要地方道鹿児島・蒲生線」も計画的につくられたと考える。「西田本通り」と「千石馬場」，「千石馬場」と「主要地方道鹿児島・蒲生線」，「主要地方道鹿児島



第７図　鹿児島城下の町並み

・蒲生線」と「竪馬場に平行する内城東側の通り」の角度は，それぞれ 150 度で見事に一致している。しかも，それぞれの変換点の距離が１：２となっており，中央公園南東隅にあった枡形から西田橋までの距離と同じ距離で，鹿児島城の北東境とされる新橋に至る。また，谷山街道は千石馬場を二等分する地点で直交するようにつくられており，道に対する計画性が窺える。

上述の様な，地形に制限されながらも見事なまでに計画された町並みを眺めてから改めて城内をみると，これまで疑問であった御楼門の位置も理解できるようになった。御楼門橋から吉野橋までの距離と御楼門橋と照国通りの堀までの距離が，１：２の関係になるのである。また，名山小学校の北東境が上町と下町の境とされ，ここから俊寛堀と新橋までの距離が１：１で一致する。揚村固氏と守真和弘氏は鹿児島城御楼門の柱間が規則正しい比になっていることに対して，「潔癖とも言えるほど周到に計画・設計された平面寸法体系」と指摘しているが（揚村・守真 2010），まさしく鹿児島城下の区割りについてもその事が言えるのである。

３　城づくりの変換点

(1)　構造

ア　地形

島津氏が北薩地域から鹿児島市域に入ってきたのは 14 世紀であり，島津家５代貞久が暦応４（1341）年（南朝年号興国２年）に東福寺城（現在の多賀山公園）を攻略し，６代氏久が居城したことにはじまる。その後，島津家７代元久が嘉慶元（1387）年（南朝年号元中４年）に清水城（現在の清水中学校とその上）に移り，上町が繁栄した。さらに，15 代貴久が天文 19（1550）年に築いた内城（現在の大龍小学校敷地）を経て，慶長６（1601）年から縄張りがはじまった鹿児島（鶴丸）城が拠点となった。東福寺城と清水城は，いわゆる中世城館であり，シラス台地縁辺部を加工した南九州独特の山城である。

一般的に中世の山城から平山城となり，近世になって平城になるといわれる。鹿児島で平城が最初につくられたのは，肝属川流域に位置する下伊倉城とされる（下伊倉 1983）。島津氏で平地に城を構えるようになったのは，貴久の内城であり天文 19（1550）年のことである。その後，三州統一や九州制覇に向けて，義弘の松尾城や義久の富隈城が山城や平山城として築かれる。本格的に平地での屋形がつくられるのは鹿児島城と国分城であるが，背後には山城が控えており，中世の城づくりを脱し切れていない。地形的に平地が少ない鹿児島県内では，平城をつくりようがなかったとも言える。

イ　石垣

南九州における中世城館は，シラス台地縁辺部を利用して築かれている。シラスは他の土壌に比べて掘削が容易であり，しかも雨水に弱いため垂直の方が安定し，高さ 20ｍほどの空堀をつくることが一般的である。したがって，他地域でみられるような石垣を必要としなかった。鹿児島で最初に石垣をもつ城がつくられるのは，屋久島の楠川城と義弘がつくった栗野の松尾城といわれる。最近，新東晃一氏を中心に伐採と測量調査が進む，川内の安養寺城跡に石垣がつくられていることが確認されている。安養寺城は豊臣秀吉勢がつくった城であるとともに，地質がシラスではないので小規模ながらも石垣が必要だったと考えられる。屋久島は花崗岩地帯であるので，土地を造成するには削るよりも石を積み上げた方が適していたと考えられる。したがって，南九州独特のシラス地形に石垣づくりの城をつくるのは，島津義弘が天正 18（1590）年につくった栗野の松尾城が最初であると言える。その後，義久の富隈城と義弘の帖佐御屋地に石垣が築かれるが，松尾城を含めこれらは野面積みによるものである。

溶結凝灰岩による切込み剥ぎによる精巧な石垣がつくられるのは鹿児島城からであり，義弘の加治木屋形にも採用されている（写真１）。切込み剥ぎは石同士の隙間がなく，多角の面で接しているので，頑丈な上に見た目も美しい。火山地帯である鹿児島には溶結凝灰岩が身近な場所で豊富に採れ，柔らかくて加工がしやすいことから，江戸時代以降急速に広まっていく。中世までは石塔ぐらいにしか使われなかったが，護岸や墓石など溶結凝灰岩の性質を活かして利用度が高まり，「石の文化」と言われるほどになった（平田 1995）。加治木屋形の石垣は加治木石による複雑な切込み剥ぎであり，弧状の接点もみられる。また，加治木石は黄白色で気泡も多く，見た目が琉球石灰岩に似ていることから，琉球や中国との関連性も追究する必要がある。

写真１　加治木屋形の石垣

ウ　水堀

内城には，石垣や堀がなかった可能性が高いことは前述した。底面の調査で明らかになっている訳ではないが，本格的な水堀がつくられるのは富隈城からであると考えられる。水を湛える堀であるので護岸が必要であり，石垣の他に杭と竹によるカラミが考えられる。鹿児島では「カラン」と呼んでおり，二つの竹の束をねじりながら編み込む技法である。富隈城の反対側の護岸がどの様な技法によるものか，今後の課題である。鹿児島での水堀は，鹿児島城と国分城で採用されている。

(2)　軸方向

城や町並みの方向は，16 世紀まで東西南北軸を基準にしていたが，鹿児島城と国分城は地形に合わせた軸となっている。ここに，当主による考え方の違いをみることができる。義弘が最後まで東西南北軸を採用したのに対し，息子の家久は地形に合わせた町づくりを目指した。鹿児島城築城開始後に義久は国分城をつくるが，家久婦人が義久の娘亀寿であることから，娘婿の考えに合わせたとしてもおかしくない。徳永和喜氏は，「義弘は戦国武将としての城認識であり，家久は近世大名としての城認識である」とし，時代の変わり目による考えの違いを指摘している（徳永 2008）。

家久は鹿児島に築城する以前，姶良市にある瓜生野城（建昌城）を候補としていた。1600 年５月 25 日の文書によれば，義弘は瓜生野城（建昌城）よりも鹿児島の東福寺城を改築し，上町一帯を麓にするよう薦めている（「家久公御譜中」大日本古文書『島津家文書三』）。さらに，鹿児島城の築城がはじまった 1602 年７月 16 日にも，上町一帯を城下とするよう具申しており，一貫した考えをもっている（「御文庫四拾八番箱中」「家久公御譜中ニ在リ」大日本古文書『島津家文書三』）。上町一帯であれば，東西南北軸の町づくりができると考えていたのではないだろうか。三木靖氏は義弘について，島津氏の「伝統的な城を本拠にした領国統治」を目指し，「特に近隣の城に関心を持ち続けた」と述べている（三木 2013）。正に義弘が，最後まで東西南北軸にこだわったことが城のつくり方にも表れている。

鹿児島城や加治木屋形の縄張りの際は，明国人易学者の江夏友賢が占ったとされる。江夏友賢は博学を修めた学者であり（徳永 2008），城の地相だけでなく町づくり全体を考えたのではなかろうか。その際，家久と義弘の意を充分汲んで，それぞれの理想とする城および町づくりを提案したと考える。今後，城や町並みにどの様な中国の技術や思想がみられるか，多角的な視点でみていくことが課題である。

４　おわりに

４人の当主の城および町づくりをみてきたが，地形を熟知した上で壮大かつ緻密な計画と高度な技術が隠されていることに改めて気づかされた。今後，義弘が生まれた伊作城，内城以前の一宇治城および清水城と東福寺城，さらに前の出水市屋地がどの様な計画の基に築かれたのか，みていくことが義弘の考えを裏付けるためにも必要である。また，藩内に 113 箇所あったされる外城がどの様な計画でつくられたか想像しながら歩くことによって，各地域の特質がみえてくると思われ，楽しみがまた一つ増えたようだ。叱咤激励を願いたい。なお，文献史料の解読には長崎慎太郎氏の協力を得た。先学の方々を含め，感謝申し上げる。

【参考文献】

揚村固・守真和弘　2010　「鹿児島城「御楼門」の復元的研究」『鹿児島県立短期大学紀要』第 61 号　鹿児島県立短期大学

五味克夫　1979　「内城（大龍寺）跡について」『大龍遺跡』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（１）

下伊倉肇　1983　「下伊倉城」『中世城館跡調査カード』鹿児島県立埋蔵文化財センター蔵

徳永和喜　2008　「鹿児島（鶴丸）城築城にみる思想　－家久の「城認識」と展開を中心に－」『黎明館調査研究報告』第 21 集　鹿児島県歴史資料センター黎明館

東和幸　2012　「鹿児島における江戸期前後の土地区割りについて」『南九州市薩南文化』第４号　南九州市立図書館

平田信芳　1995　『石の鹿児島』　南日本新聞開発センター

三木靖　2013.03.16　「島津義弘の活躍と城」　講演会レジュメ

鹿児島市教育委員会 2001 「大龍遺跡 B 地点」鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書(34)

隼人町教育委員会 1999 「富隈城跡Ⅲ」鹿児島県姶良郡隼人町住吉

鹿児島県立埋蔵文化財センター 1997 「本御内遺跡Ⅲ」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書(21)

姶良町教育委員会 2004 「姶良町内遺跡詳細分布調査報告書」姶良町埋蔵文化財発掘調査報告書　第９集

加治木町教育委員会 2003 「御里窯跡」加治木町埋蔵文化財発掘調査報告書４

註１　東和幸・東友子・東瑞希が平板で実測した。

註２　上田耕氏のご教示による。

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報　縄文の森から　第6号

発行年月　２０１３年３月

編集・発行　鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318　鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森２番１号

TEL　0995-48-5811

E-mail　maibun@jomon-no-mori.jp

URL　http://www.jomon-no-mori.jp